

スイスの 教育事情から



パイポオルガンビルダー
リチャード・ニコル 氏

教育随想

岡崎の教育 月報



平成16年2月1日

2月号

発行・編集
岡崎市教育委員会

今月の紙面

教育随想	1
パイポオルガンビルダー リチャード・ニコル氏	
この人に聞く	2
からくりおもちゃ研究家 磯谷 榮一氏	
羅針盤	2
六ッ美南部小学校長 中根 久治	
ふれあい	3
上地小 鈴木 基之 東海中 向山 香	
特集	4
不審者から子供を守れ	
お知らせ	6
フォト・ヒストリー	8
ビオトープ(平成7年)	
この本を	8

日本の教育を考えるにあたり、私の国のスイスの状況と比較してみた。スイスは小さい国でありながら四言語を使用し、周りはすべて他の国に囲まれている。

こうした状況は常に他の国の教育方針に向け、自分たちの教育を検討する環境をもたらす。

私自身は四人の子供を持ち現在まで日本の学校教育を受けさせてきたが、あることからスイスの文部省の現在の教育指針を知ることになり、大変な驚きと衝撃を感じた。

一九八四年に定められたその概要を紹介する。「義務教育規定」三項

一 子供の教育は家庭が行うことが原則であり、学校は単にその手助けをするために存在していることを忘れてはいけない。



二 学校は、決まったことを教え込むのではなく、それぞれの知的、感覚的、身体的潜在能力を引き出すこと。周りに左右されることのない個々の価値観と個性を形成し自己を築くこと。それにより、他の存在を認め、自分を取り巻く社会や環境の中での自分の存在を知ることを目指す。

三 学校は決まったプログラムを全員同時に進行するのではなく、個々の発達と興味に沿っての内容でなければならぬ。比較すること、挫折感を味わわせることは決して



してあってはならず、結果の善し悪しではなく、自分が何をなぜ学んでいるかを知ることがより大切である。

こうしてみると日本の教育は、以前のスイスのように、同じ内容で同じ結果を達成することを皆が目指しているように感じる。どちらが好ましいかは別として、日本人が今一度教育を考える機会になればと望むと同時に、自身の子供たちの環境がすべてではないことをぜひ知らせておきたいと思っている。

この人に聞く

ふるさとシリーズ



からくりおもちゃに学ぶ

からくりおもちゃ研究家

磯谷 榮一 氏

小さな階段の上からくり連理返りの人形がそつと置かれた。「えいつ」と声をかけると、おもむろにひとつの人形が逆立ちを始める。そしてぐるぐり返しをして着地すると、今度は手をつないだもうひとつの人形が回転を始める。見とれているうちに、ふたつの人形が交互に回って階段を一段ずつ降りていき、最後はきめのポーズ。

この何ともみごとな動きの種明かしは、曲芸師の腕の中に仕込まれた「水銀」だという。磯谷さんのとつ

ておきの作品である。

からくりおもちゃを作り始めたきっかけについてお聞きすると、

「六十三歳から『奥殿学区子どもの家』にお世話になり、そこでの子供たちの遊びが市販のものばかり使っていることに驚きました。もっと、自分で作ったものや考えたもので遊べればと思ったのです。もともと僕は理科の教師だから、実験器具等、もの作りが好きでしたから。」と、愛嬌のある自作のおもちゃを動かしながら楽しそうに話された。

最初は、江戸時代の動くおもちゃから研究を始められた。通常は書物や写真、絵などで調べたが、時折出かける旅行では、予想以上の収穫があったそうだ。全国各地にはその地方ごとに独特の動くおもちゃがあり、新たな発見や驚きも多かったと研究成果を説明してくださった。



「座敷からくり」については、江戸時代に出版の「機巧図彙」という難解な本を参考にされている。制作して難しいところをお伺いすると、「からくりの秘伝は直伝で、肝心なところは記録として残さず、ぼかして書いてあるので、自分で考えるしかないのです」とのこと。したがって、一体を完成させるのに、十回以上は失敗し一年に一作品完成させるのがやつとのことと話された。

現在、磯谷さんは江戸時代のからくりおもちゃを参考に「祖道和尚」「びんぴんなまず」「大蛇おどり」等、独自の作品を制作している。また、地元の小中学校でボランティアとして、授業等でおもちゃ作りを指導されている。

最後に、未来を担う子供たちに向けて、温かいまなざしで語られた。「戦後は、『古きものは悪しきもの、新しいものはよきもの』という考えが広まった。しかし、古いものの中にもよいものとそうでないものがあり、よいものは残していくということとを忘れてはならない。また、それを体験することで気づいてほしい。」

氏名 いそがい えいいち
生年月日 昭和七年八月五日
住 所 宮石町字ヲチタ六十一—四

羅針盤

学校の役割

六ツ美南部小学校長 中根 久治

本年度の総合的な学習の時間の主題の一つを「碧海の大地」とした。

「碧海の大地」では明治四十四年から昭和十八年までのわずか三十二年間だけ岡崎から六ツ美を経由して吉良まで走っていた西尾鉄道を切り口として郷土を学び、郷土から学ぶ学習をねらいとした。我が町に昔はSLが走っていたというのは子供たちの興味をひく教材であり、過去にも何度か遠足や郷土学習のテーマとして取り上げられた記録がある。西尾市の三和小学校も西尾鉄道の沿線の学校であったことから、これに賛同を頂き、岡崎と西尾の小学校の協同で追究するテーマとなった。また、鉄道が休止となり、線路が撤去されて六十年になる節目として、両学校の学区民にも啓発するため西尾鉄道の資料展も企画した。

友達になってくれるって

上地小 鈴木 基之

七月の終わり、竜美丘小三年四組から学校紹介と学級紹介が届いた。学級交流の始まりである。しかし、実際に出会っていないためか、子供たちの交流への意識は低かった。

そこで、ソフト「わいわいレコーダー」を使っての交流へと進展させた。お互いの学習を発表し合い、相手を意識し始めると、次第に交流は深まっていった。そして、テレビ会議システムと「わいわいレコーダー」による学習発表会を実施することになった。第一回は竜美丘小から学区の花屋やスーパリーについて発表してもらい、上地小がその感想を伝えた。自分たちの感想が相手校の大型テレビに映し出されているのを見て、照



れくさそうな表情をしていた。第二回は、逆に上地小が学区のスーパリーについて調べたことを発表して感想を送ってもらった。

子供たちは、今か今かと感想が画面に出るのを待っていた。「来たあ」と大歓声があがり、画面に出てきた感想をうれしそうに読んでいた。その後、メッセージ機能を使って、お互いに会話をするまでに発展した。

「先生、友達になってくれるって。」学級交流の第一歩は、見事に大成功だった。



自分らしく

東海中 向山 香

「今聞こえるのは、自分の高鳴る心臓の音だけだ。さすがに主君義経様に逆らえるはずもない。」

古典の授業で「扇的」の実況中継に挑戦した。那須与一になる生徒、源義経になる生徒。それぞれ自分の好きな人物を選んで「扇的」の場面を見つめ直し、人物の思いを加え



ながら自分の言葉で書き直していく。

「先生これどう?」、そう言っているのは、普段あまりやる気を見せないA男であった。矢が力強く飛んでいく様子がうまく表現できていることをほめると、得意気な顔で自分だけの表現を考えては見せにくるようになった。その生き生きとした表情には、自分で古典を読んでいる満足感があふれていた。そして、「人とは違う自分だけの言葉」を大切にしようという雰囲気クラスを作り出してくれた。いつも書くことを嫌がる生徒たちが、競い合って自分なりの「扇的」を完成させることができたのだ。古典というだけで苦手意識を感じてしまう生徒が多い。しかし、生徒の目の前には確かに「扇的」の世界が広がっていた。

この資料展が難産であった。そもそも西尾鉄道の資料はどこにもまとめて保管されていなかったからだ。

見切り発車の陰の声を気に留めながら、私は敬老会で学区のお年寄りに呼びかけたり、図書館へ、名鉄資料館へと、一枚の写真を求めて訪ね歩いたりもした。何度もあきらめかけたが、あと十年たてばますます資料収集は困難だから、今が大切と思いい、老人たちを訪ねて手文庫を開けてもらった。大正から昭和の初期は写真機などは庶民の持ち物でなく、まして鉄道などを撮影した写真はなかった。それでも、切符一枚から古地図一枚と集まりはじめて、なんとか西尾鉄道の概要が資料で示せるまでに至ったのは直前のことだった。

「なんで学校がやるの」と聞かれ、「学校だからできる」と答えた。地域の資料はだれかがまとめないとなすすます消えていく。学校の役割として、地域の歴史文化の継承に一役担うべきだと思う。「分らないことは学校に聞けばいい」と言われる、だれでも利用できる学区の知的情報センターとしての役割を持つべきだ。今も、西尾鉄道に関する新たな資料の提供が少しずつではあるが続いている。過去との線路はつながった。



不審者から 子供を守れ

▲ 警察と連携した不審者侵入対応訓練（六名小）

社会を震撼させた「池田小校内児童殺傷事件」から二年八か月。この事件を契機に学校内外での不審者に対応する活動が広がっている。近年、岡崎市でも不審者による被害の報告が少なくない。「時間帯別不審者による事案発生件数」を見ると、子供たちの登下校時間帯である七〜八時台と十五〜十九時台が圧倒的に多いことが分かる。

これらの現状から、市内各小中学校は積極的に不審者対策を進めている。今までの災害に対する避難訓練に加え、不審者の侵入に対応する訓練を実施する学校が約半数ある。また、「防犯教室」「護身術教室」と銘打って不審者に対する具体的な対応を学習している学校もある。これらの活動は、愛護センターや警察の方の協力も得て連携を深めながら行われている。

家庭や地域への啓発活動としては、文書配布はもちろんのこと、防犯マップやテキストを準備して担任や家庭に配布している学校がある。また、来校者に対しては、不審者と区別するため、ネームプレートやリボンなどを配布したり、受付を設けたりしている。

学校内外でのパトロールの強化も、多くの学校で図られている。最近では、学区ぐるみでの活動を展開する学校もある。全家庭にパトロール用の腕章を無料配布したり、犬の散歩を利用した「愛犬パトロール」などが実施されたりしている。

今後も学校・地域・警察がさらに連携を深めて、不審者から子供を守っていききたい。

各学校・地域での活動

訓練的活動

不審者侵入対応訓練・護身術教室・防犯教室

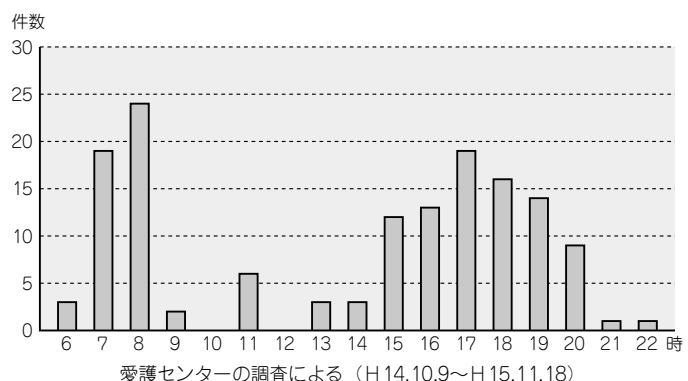
啓発活動

警察による講演会・学区のマップ配布・文書回覧・防犯冊子配布・看板の設置・学区青少年健全育成大会実施・OC委員会での議題

学校・学区での活動

来校者への名札・リボンの配布・全家庭へリボン配布・校内パトロール
愛犬パトロール

時間帯別不審者による事案発生件数





▲ 文化講座で護身術の指導を受ける生徒たち (竜海中)



●不審者対応訓練・防犯教室の実施●

▲ 警察によるPTA防犯教室 (矢作北小)

●学校内外でのパトロール強化●



▲ PTAによる校内警備ボランティア (岩津小)



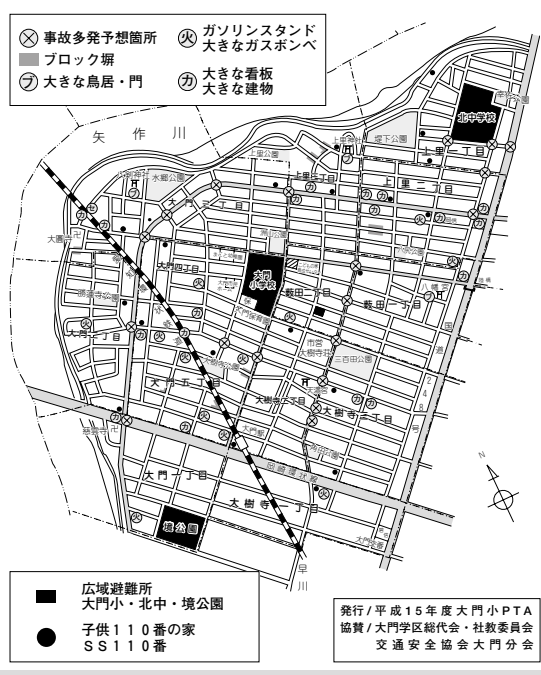
▲ 「安全・防犯」の腕章をつけて登下校の巡回 (六ッ美南部小学区)



▲ 学区の方の協力による愛犬パトロール (大門小学区)

●防犯への啓発活動●

大門学区
防災・防犯・交通マップ



▲ 大門小で配布されているマップ



▲ ネームプレートと防犯テキスト



● 教育最新情報

「フルブライトメモリアル基金」

米国教師団 岡崎市教育視察訪問



平成十五年十一月二十四日から十二月一日まで、日米教育委員会「フルブライトメモリアル基金」による米国教育者招聘事業として、十九名の米国人教師が岡崎市を訪問した。本事業の目的は、「米国の教育者に、約三週間の日本研修を通して、初等・中等教育を中心とした日本の教育制度および文化・社会などの現状を見てもらい、日本についての理解を深めてもらうこと」となっている。

二十四日の午後から中学生ガイドによる岡崎公園の見学を皮切りに、翌日は市長表敬訪問、教育長との懇談会やPTAとの意見交換などを行い、岡崎市の教育についての概要を理解してもらった。

二十六日から二十八日にかけては、六ツ美中、新香山中、本宿小、上地小の四つの中学校と光ヶ丘女子高等学校を訪問し、実際に授業を参観・参加することにより、岡崎の教育についての理解を一層深めてもらった。そして、週末には、市内の小中学校の教師の家でのホームステイを通して、日本の生活や文化を体験してもらった。

ここでいくつか滞在中の様子を紹介する。

二十四日の午後、竜海、城北、岩津、矢作、矢作北中学校生徒五十五名が、学習してきた英語を実際の場で試してみようと、岡崎城と家康館の英語ガイドに挑戦した。当日までに、事前に見学場所の下

見をし、どのような英語の説明が必要か、また、あわせて岡崎市の歴史も学習してガイドに備えた。米国教師団と初めて顔を合わせたときは緊張気味で説明も硬いものであったが、次第に慣れてくると会話も弾み、多くの笑顔が見られるようになった。約二時間のガイド後、お互いに別れの惜しむ姿が印象的であった。

A中学校のBさんは、「外国の先生がわたしたちの英語に真剣に耳を傾け、理解してくれようとしたのでとてもうれしかったです。でも、質問に答えることができないときもありました。これからも頑張つて英語を勉強します」と話してくれた。

また、米国人教師のCさんは、「日本の生徒たちはたいへん礼儀正しく、一生懸命、岡崎について教えてくれました。英語もとても上手でした。すばらしいときを過ごすことができました、とても感謝しています。帰国後、必ずお礼を込めて連絡を取ります」と答えた。

は、すべての学校で心温まる歓迎を受けた後、授業を参観・参加し、昼には給食を子供たちと一緒にとって交流を深めながら滞在を楽しんでいた。訪問を終えた教師団からいただいた岡崎市の教育についてのいくつかの感想を紹介する。

○感心した点

- ・ 教育長との懇談会で説明されたことが、各小中学校で実際にに向けて努力されている。
- ・ 心から歓迎していただき、たいへん感動した。特に歓迎会の歌は、心が震えた。
- ・ 子供たちがとてもよくしゃべられ、礼儀正しく、相手に対して誠意をもって接する心が育っている。
- ・ 子供たちが学ぶ意欲に満ちあふれている。
- ・ 基礎・基本的な読み書き計算の徹底が図られているので、学習を深める基盤がどの生徒にもできている。
- ・ 児童生徒一人一人が、自信をもって学んでいる。
- ・ 児童生徒の中に学びのリーダーが育っている。

・ 先生方がとても情熱をもって指導されている。アメリカの先生も見習いたい。

○改善をしたい点

- ・ 課題解決的、問題解決的な学習で、学びの過程を重視した学習をさらに心がけるとよい。
- ・ 知識を与えるのではなく、体験や経験から自分の意見を持ち、教師や生徒同士の対話で、知識を得ていくのがよい。

岡崎の学校やホームステイをした家庭で受けた歓待へのお礼とともに、岡崎で学んだ教育をぜひアメリカの教育に活かしたい、という決意を胸に帰国の途につかれた。



▲ 生徒たちによる英語ガイド

●表 彰

◆第十一回全国中学駅伝

女子十八位 六ッ美中学校



▲2年連続全国大会出場の力走(六ッ美中)

◆第三十七回愛知県教育研究論文
・個人研究の部
優秀賞

「学ぶ喜びをわかち合い、共生のあり方を問う社会科の授業」 広幡小 竹平真仁
佳作

「かわり合い高め合う言語活動」 矢作南小 森下成樹
「主体的な学びと豊かな量感を育てる指導をめざして」 六ッ美南部小 加藤嘉一

◆第二回「全国こども科学映像祭」

・文部科学大臣賞
「和ろうそく」伝統のわざを探る」 東海中学校報道部

・優秀作品賞
「冬を越せない山綱川の外来魚」 山中小六年 内田光咲
山中小三年 内田智文

◆平成十五年度「私のアイディア貯金箱コンクール」
・学校賞 三島小学校

◆名古屋市民芸術祭児童詩部門
・市長賞 羽根小一年 酒部里香
・罍聖講賞 羽根小一年 山本将司

◆愛知県アンサンブルコンテスト西三河北地区大会
・金賞(県大会へ出場) 岩津中学校
竜海中学校

◆平成十五年度愛知県読書感想文コンクール
・県知事賞 北野小四年 藤岡実里
・県教育委員会賞 矢作東小二年 徳原誉人
・県優良賞 羽根小二年 角南仁美
矢作北小二年 田中佑希
竜美丘小三年 小島秀弥
福岡小三年 稲垣壯人
城南小三年 伊藤瑠香
根石小五年 鈴木達三
六ッ美西部小五年 牧原史奈
広幡小六年 宮地翔也
山中小六年 内田光咲

六ッ美南部小六年 足立のどか
葵中一年 大嶋航矢

矢作北中一年 黒澤美紀
河合中二年 白井静香
城北中二年 本澤真綾
竜南中二年 清野万葉
東海中二年 加藤 茜

◆岡崎市ごみ減量推進運動絵画作品展
・市長賞 城北中三年 松島里佳
・議長賞 小豆坂小六年 岩瀬友子
・廃棄物減量等推進議会賞 美川中三年 岩田由貴
・教育委員会賞 藤川小四年 柴田康晴
・観光協会賞 岡崎小五年 鈴木優太



▶市長賞 城北中三年 松島里佳



▲議長賞 小豆坂小六年 岩瀬友子

●ハートピア岡崎だより

○心を育てる体験学習

市街地から離れているため、か、当所の気温はかなり低く、冷え込みが強いこのごろでは、グラウンドの所々に霜柱が見られる。

今朝も、霜柱が見られたので、A君に「これ何だか知っているか」と質問してみた。彼は、霜柱であるとは知らなかったようだ、即座に、「水分が凝固したものだ」と答えてくれた。それだけだった。

私としては、手にとつて見ないまでも、足で踏みつぶして感触を楽しむとか、針の束のように美しく輝く様子に見入るとか、期待していた。それだけに、がっかりすると同時に、体験学習の場を意図的に、さらに多くしていく必要を感じた。

初回の面接時、「家では何をしているの」とたずねると、男子はほとんど「TVゲーム」と答える。最近のゲームは高

速かつ3D画面であり、一見、臨場感にあふれているよう

はあるが、五感を使うという点ではどうだろうか。

不登校であるということは多くの場合、社会性や学力についての懸念だけでなく、大切な体験のチャンス無くし、豊かな心の発育をも阻害している現実があるように思う。

さて、こうしたこともあって、平成十年より始まった子ども美術博物館での陶芸教室の企画を検討した。体験学習の場として意味のあるものになるように、準備を進めてきたところ、本年度は、昨年

を大きく上回る十七名の子供が参加した。参加者の中学二年のB君は、小学生のときに紙粘土が口に入ったという苦い経験があり、あまり乗り気ではないままに参加した。しかし、この体験後、次のよう

な感想をまとめた。

土粘土は意外と固く冷たい。これは僕としては好きな感触だ。触れているだけで楽しい。こんな物は、生まれて初めて触った気がする。なぜ参加に乗り気になれなかったのか、今となっては疑問を抱く。みんなが楽しみにしていた理由が分かった気がした。

彼の新たな一歩を期待したい。

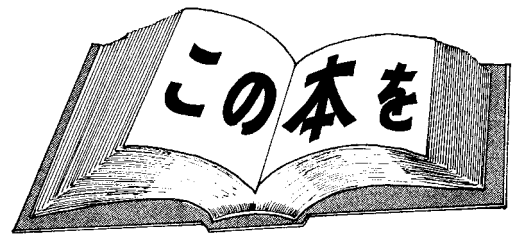
・カ
ツ
ト
本宿小山口泰代

ビオトープ (平成7年)

写真提供：緑丘小学校



環境教育の重要性の声が高まりつつある中、市内各校に先駆けて、平成七年、緑丘小学校に「わくわく小川」が誕生した。水が循環する自然に近い状態で、クロメダカ・カワバタモロコ・ホトケドジョウなどの絶滅危惧種を育て、学習している。以降、ビオトープ造りに取り組む学校も急速に増えた。子供たちが和やかな心で生き物と戯れたり、観察したりする姿はほほえましい。豊かな心を育てるためにも、ビオトープを大いに活用したいものである。



- *花よりも小さく 星野 富弘 ¥1400
偕成社
- *カリスマ体育教師の常勝教育 原田 隆史 ¥1400
日経BP社
- *天使の相棒 ねじめ正一 ¥1600
集英社
- *二学期制 島村 正勝 ¥1500
第一公報社

- *生涯最高の失敗 田中 耕一 ¥1200
朝日新聞社

ノーベル化学賞受賞の報に接し、インタビューを受ける著者の誠実な応答が今も心に残っている。飾らぬ人柄と、まず共同研究者への感謝の言葉を口にした著者に、好印象を持った人も多いと思われる。

本書は、そんな著者がはじめてエンジニアとしての人生を語ったものである。そこには、ライバル研究者への公正な態度、チームワークの大切さ等が多くのエピソードとともに語られている。そして何よりも、粘り強くあきらめないで努力することの大切さを本書は教えてくれる。

屋外で元気に遊ぶ子供たち。この時期は寒さもあるが、子供たちにはあまり関係がないようだ。

「子供は風の子」という言葉を、今はあまり聞くことがなくなった。が、風邪の子にならないように、健康な体作りもしっかりと呼びかけていきたい。

シリウスが東の夜空に青白い光を放っている。「冬の大三角」の一点を占め、全天一の明るさに輝く。恒星は、その温度により赤や黄や白に光るといふ。シリウスの青白い光は、二月の寒さをいっそう際立たせている。寒空の下、子供とともに家路を急ぐ。春はまだ遠い。

シオ スア

朝の読書が、全国の小・中・高校で積極的に導入されている。文化審議会の報告案においても読書活動の重要性が提案された。吉田松陰が約三年間の獄中で読んだ書籍数は一六一五冊、月平均にすると四五冊と言われている。朝の読書が日本を変える源泉になるかもしれない。

数字を見て愕然とさせられる。市内で約一年間に一五〇件を超える不審者や変質者の被害が報告されている。子供たちは宝であり、学校は子供たちの城である。わたしたち大人はしっかりとスクラムを組み、子供たちには自分の身を守る術を学ばせ、不審者対策を進めよう。